

## 台湾公学校における「国語科」教育 第 3 期国語読本使用期を中心に

合津美穂（東京都立大学大学院生）  
tmgohzu@mb.infoweb.ne.jp

### 1. はじめに

#### 問題の所在

#### \* 大正末期から昭和初期の台湾の公学校の「国語科」教育

1922（大正 11）年、台湾教育令発布

- ・中等教育以上は日本人と台湾人の共学制が認められる。
- ・公学校の就学年齢、教科課程、卒業資格等が、日本人児童の学ぶ小学校と同等となる。

公学校の教育は質的変換を迫られる

- ・「国語科」教科書：第三期国語読本『公学校用国語読本第一種』（以下、第三期国語読本）  
第三期国定読本『尋常小学国語読本』との連続性を一定程度保つ<sup>1</sup>  
全五期の国語読本の中で台湾人に最も深い影響を与えた教科書<sup>2</sup>

（表 1）台湾公学校国語読本一覧<sup>3</sup>

期 数	初版発行年分	読本名称	巻 数
第一期	明治 34-36 年（1900-02）	台湾教科用書国民読本	巻 1-12
第二期	大正 2-3 年（1913-14）	公学校用国民読本	巻 1-12
第三期	大正 12-15 年（1923-26）	公学校用国語読本第一種	巻 1-12
第四期	昭和 12-17 年（1937-42）	公学校用国語読本（第一種）	巻 1-12
第五期	昭和 17 年（1942）	コクゴ、こくご	1-4
	昭和 18-19 年（1943-44）	初等科国語	1-8

- ・先行研究：第三期国語読本の分析 ex.) 黄（1993）、黄（1994）、周（2003）

「構成式」話し方教授法 ex.) 近藤（1988）

当時の「国語科」教育の全体的な枠組みそのものを論じた研究の不在

教科書・教授法といった教育を構成する要素が実際の教育現場で果たした役割、さらには「国語」としての日本語の学習が学習者にとってどのような意味を持ち得たのかといったことを解明するためにも、まずは当時の「国語科」教育がどのような理念のもとに営まれていたのかを明らかにしておくことが必要であろう。

<sup>1</sup> 台湾総督府（1927）参照。

<sup>2</sup> 周（2003）参照。

<sup>3</sup> 周・許（2003）p.34 を一部修正。

本発表の目的

1. 第三期国語読本使用期の「国語科」教育の全体像を把握する。
2. どのような形で具現化されていたのかを当時の教授細目から明らかにする。

資料：台北師範学校附属公学校<sup>4</sup>の教師による論考

台北師範学校附属公学校話し方研究部編（1926） 台北第一師範学校附属公学校研究部編（1930）  
台北師範学校附属公学校研究部（1924）

2. 公学校教育における「国語科」の位置づけ

1922（大正11）年2月6日公布「台湾教育令」（勅令第20号）第4條

「公学校八児童ノ身体ノ発達ニ留意シテ之ニ德育ヲ施シ生活ニ必須ナル普通ノ智識技能ヲ授ケ国民タルノ性格ヲ涵養シ国語ヲ習得セシムルコトヲ目的トス」

参考 1901（明治35）年4月1日発布「台湾小学校規則」（府令第24号）第1條

「小学校八児童ノ身体ノ発達ニ留意シテ道德教育及国民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」

（表2）修業年限六年ノ公学校各学年教授程度及毎週教授時数表<sup>5</sup>

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
修身	2	2	2	2	2	2
国語	12	14	14	14	10	10
算術	5	5	6	6	4	4
日本歴史					2	2
地理					2	2
理科				1	2	2
図画	3	3	1	1	1	1
唱歌			1	1	1	1
体操			2	2	2	2
実科					男4	男4
裁縫及家事				女2	女5	女5
漢文	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)	(2)
計	22(22)	24(26)	26(28)	男27(29) 女29(31)	男30(32) 女31(33)	男30(32) 女31(33)

一、本表教授時数ノ外図画は学校長ニ於テ第一学年、第二学年各毎週一時ヲ課スルコトヲ得

二、本表教授時数ノ外実科、裁縫及家事ノ為ニ学校長ニ於テ毎週三時内実習ヲ課スルコトヲ得

<sup>4</sup> 1927（昭和2）年、台北師範学校は台北第一師範学校と台北第二師範学校に分割された。台湾教育会編（1939）pp.668-669。

<sup>5</sup> 台湾教育会編（1939）pp.379-381。

1922（大正 11）年 4 月 11 日発布「台湾公学校規則」第 23 條

「何レノ教科目ニ於テモ常ニ徳性ノ涵養ト国語ノ習熟トニ留意シテ国民ニ必要ナル性格ヲ陶冶セムコトヲ務ムヘシ」

### 3. 「国語科」教育観

#### 3.1 「国語科」教授の要旨

1922（大正 11）年 4 月 11 日発布「台湾公学校規則」第 25 條

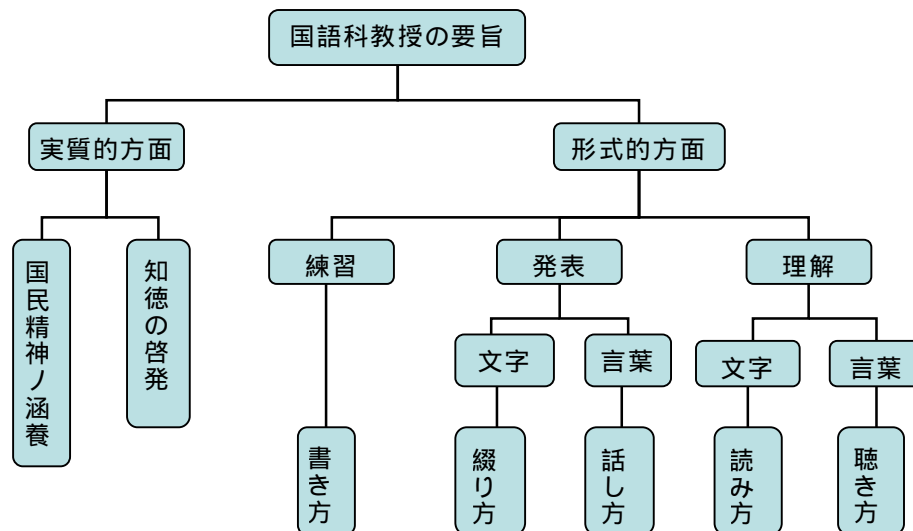
「国語ハ普通ノ言語、文章ヲ知ラシメ正確ニ思想ヲ発表スルノ能ヲ養ヒ兼テ知徳ヲ啓発シ特ニ国民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」

『話し方教授に関する研究』における解釈<sup>6</sup>

\* 「国語科」教育の目的：「第一目的 言語や文字を自由に使用し得る能力」

「第二目的 知徳を啓発することは国民精神の涵養である」

「即ち前者によって、1.言語の教授、2.文字の教授、3.語句の教授、4.文章の教授を徹底せしめこれらを通じて、1.解釈法、2.鑑賞法、3.批判法を深めそして常に知らしめ或ひは味はしめ或ひは練習せしめ或ひは感悟せしめ或ひは表現せしめ且それを正させる事によつて、内的生命を覚醒せしめて生命の漲つた創造を生ましめ、よつて以つて後者即内的精神生活の内容を豊富ならしめて、人格を円満完全ならしめ特に国民精神を豊潤ならしめるにあると信ずる。国民精神の涵養については国語教育は極めて重大な使命をもつてゐるのである。」



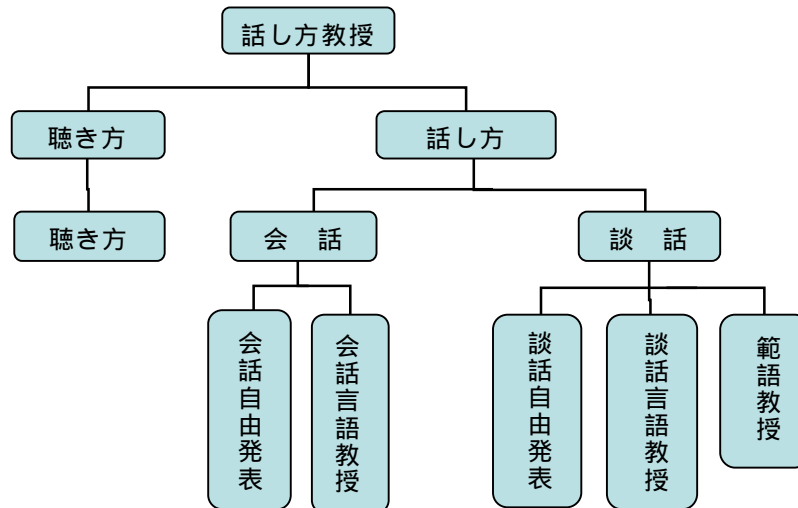
<sup>6</sup> 台北師範学校付属公学校話し方研究部編（1926）pp.8-12。

### 3.2 話し方教育（文中下線部は、原文傍点。）

「話方の本質は標準語を以つて自己の思想感情を精確に自由に生命ある発表をなす能力を養成し同時に他人の言葉をきいて精確に自由に理解し併せて智徳を啓発するにある。」<sup>7</sup>

話し方教育：「話し方」と「聴き方」の教育から構成される

第三期国語読本使用期の話し方教授法：「構成式」



#### \* 「聴き方」

- ・指導目標：「他人の話を精確、明瞭に聴取する能力を啓培する」<sup>8</sup>
- ・「話し方に於ては何といても模倣が第一に来るのであるから、発表の前には初めは取得といふことがなくてはならない」<sup>9</sup>
- ・「発音の訓練において、範語教授において、言語教授において、はたまた、自由会話、自由談話においても其の基礎をなすものは聴覚の訓練である」<sup>10</sup>

#### \* 「話し方」：「談話」「会話」から構成

- ・指導目標：「自己の思想や感情の表し方を教へるのである、と同時に形式を通じて、其の中に包含せられた思想感情を取得理解する能力を教ふるにある」
- ・「真の話し方の能力は時間と場所との拘束を脱却してうちとけて（先方の心持の中に自己の心持を融合させて）ありのままに、自然に自己の知つてゐる形式を自由に使つて語る働きである」<sup>11</sup>

「談話」：「範語教授」「談話言語教授」「談話自由発表」

- ・本質：「自己の思想感情を標準語を以つて精確に自由に生命ある発表をなす能力を

<sup>7</sup> 同上 p.13。

<sup>8</sup> 同上 p.304。

<sup>9</sup> 同上 p.13。

<sup>10</sup> 同上 p.305。

<sup>11</sup> 同上 p.17。

養成し、且つ智徳を啓発する。」<sup>12</sup>

「範語教授」：第1学年の1学期

「談話言語教授」：第1学年の2学期以降、第4学年まで

「談話自由発表」は第2学年の2学期以降、第6学年まで

「会話」：「会話教授」と「会話自由発表」

・本質：「標準語を以つて、自己の思想感情を正確に明瞭に談話し、又他人の談話を正確に明瞭に聴取する」<sup>13</sup>

### 3.3 読み方教育

「単なる文字文章の符号の学習と心得てはならぬ」<sup>14</sup>のものであり、「人間精神の各方面の陶冶は其の大部分読方教育に於て果たさなければならぬ。特に我々が文化価値の創造に当つては、其の鍵は全く読書力に依つて開くより方法はない。其の鍵を持たせることは読方教育の責任である。」<sup>15</sup>

教材の特徴：

「全人教育に向つてあらゆる内容を包含してゐる。然もそれによつて総ての精神活動の修練を営ませようとしてゐる。即ち読む材料の内容を一瞥すると、修身的なるあり、歴史的あり、地理的あり、理科的のもあり、公民的のもあり、実業的のもあり各教科に属する材料は総て読み方科に網羅されてゐる。」<sup>16</sup>

(表3) 教材内容の類別比較<sup>17</sup>

	文学	理科	修身	歴史	実業	地理	国民
第三期国語読本	94	42	36	30	30	22	18
第三期国定読本	86	28	37	40	24	32	16

参考 (表4) 周(2003)による第3期国語読本の内容分類

分類	課数
実学知識 / 近代化	68
台湾事物	67
日本事物 (日本歴史、文化、地理、天皇関係、愛国教育)	57
道徳教育	46
労働者 / 職場奉公	6
中国事物	5

<sup>12</sup> 同上 p.195。

<sup>13</sup> 同上 p.59。

<sup>14</sup> 台北第一師範学校附属公学校研究部編 (1930) p.208。

<sup>15</sup> 同上 p.207。

<sup>16</sup> 同上 p.207。

<sup>17</sup> 黄 (1994) p.39。

指導目標：1.言語の修得、2.文字文章の修得、3.現代文化の領得、4.国民精神の涵養、  
5.文学的精神の養成、

\* 「1.言語の修得」が掲げられた背景

国定読本に接近した第三期国語読本

「公学校児童は読方に於て、第一読む事が出来ないといふ」問題が生じていた<sup>18</sup>。

話し方教育と連携し、「言語陶冶」を読み方教育の基礎と位置づけるよう提唱。

「最近の読方教育は、小学校でさへ大いに言語方面の陶冶が叫ばれてゐるのに、現在の公学校の、読方教育を見るに、その逆をいってゐる様な傾きがある。それは根本的に読本教材の困難と、いふ様なことも、原因してゐると思ふが、そのために単なる器械的な読み方を多く課したり、話方方面に力を注がない様なことは、これこそ基本精神を忘れたものであつて、それで読方の成績が挙げられるものではないと思ふ。先づ読方の成績を挙げるためには、話方の成績を向上させ、最も国語科としての全一的な作用に努力して後、の読方がもつ特殊の任務も全ふし得られることを思はねばならぬ。此の意味に於て教育の根底として、先づ言語陶冶といふことを、読方教育の一主要任務と考へたいと思ふ。」<sup>19</sup>

第三期国語読本使用期の読み方教授法：「読方教育界に於ける一大躍進」をした時期

- ・「センテンスメソッド」：生命の籠もった文章は語、句等を切断して解せられるものではなく、文全体として解釈し鑑賞して初めてその文に流れている作者の生命を獲得し得るものであると主張
  - ・「鑑賞主義の方法」：文藝鑑賞の過程に立脚
  - ・「自学主義の読書学習法」：児童が自ら進んで学習する中に、単に教材そのものだけに限らず幾多の収穫を得させ、読書趣味を涵養することができるとする方法
  - ・「読解主義の方法」：文を読解して内容を把握することを尊重し、知的に論理的に取扱い、児童のノート或いは謄写刷りに作業させて、文章の内容を表解させたり文脈を辿って表書させたりする方法
  - ・「体認主義の方法」：先ず文全体を直観させてその文の中心的意味を予想させ、それを中心として節意語句等を研究指導する方法
- 「自己の教材自己の児童、自己環境を見つめて最も適切と思はれる方法をとるべきである。」<sup>20</sup>。

#### 4. 「国語科」教育の実際 - 第1学年の教授細目より -

1922(大正11)年4月11日発布「台湾公学校規則」第23條

「初八主トシテ話シ方ニ依リテ近易ナル口語ヲ授ケ漸次読ミ方、書キ方、綴リ方ヲ課シ進

<sup>18</sup> 同上 p.211。

<sup>19</sup> 同上 pp.213-214。

<sup>20</sup> 以上、台北第一師範学校付属公学校研究部編(1930) pp.107-121。

ミテハ平易ナル文語ヲ加フヘシ」

「話す」ことから「読む」こと・「書く」ことへと広げながら、どのように学習と生活との密接な結びつきを作り、「国語」による言語活動の実現を組織化しようとしたのか？その様相の一端を入門期の第1学年用の教授細目に見ていきたい。

資料：『話方読方公学校教授細目 第一二学年用』(資料1～3)

- ・台北師範学校附属公学校研究部国語科の話し方科と読み方科の訓導が編纂<sup>21</sup>。
- ・第三期国語読本を使用した一年間の実施経験を元とした、第三期国語読本使用期初期の教授細目。

第三期国語読本使用期の「国語科」教育は、この教授細目をもとに発展してきたと推察される。

#### 4.1 時間配当

##### 第1学期(全11週)

第1週目：全12時間をかけて学習用語(「教室内用語・教室出入用語」)の教授。

「聴き方に止むるものである」

「国語科」の授業にとどまらず、学校場面全体において使用されるもの。

「話し方」の入門はまず「学習用語」から入るというこの方法は、山口喜一郎が著した『国民読本参照国語科話方教材』巻一(1912年、台湾総督府発行)にその緒を認めることができるもの<sup>22</sup>。

第2週～第6週：すべて「談話」

第7週：「読本」開始<sup>23</sup>

「談話」の学習時間が圧倒的に多い。

##### 第2学期(全16週)

「談話」と「読本」に加え、「会話」と「書き方」も加わる。

「書き方」は第8週から毎週2時間ずつ、残りの10時間を「読み方」「話し方」に配当。

「読み方」と「話し方」の配当時間が等しい。

##### 第3学期(全10週)

第2学期とほぼ同様の配当時間。

<sup>21</sup> 台湾の国立中央図書館台湾分館所蔵本を使用。2005年9月の調査では、『話方読方公学校教授細目 第一二学年用』と『話方読方公学校教授細目 第三四学年用』(1925年発行)を確認。第五・六学年用の教授細目も発行されたのではないかと推測されるが、国立中央図書館台湾分館編(1980)『日文台湾資料目録』及び前田均編(2005)『平成14～平成16年度科学研究費補助金「第二次大戦期興亜院の日本語教育に関する調査研究」研究成果報告書別冊 日本語教科書目録集成』にも掲載がないため、現存しているかどうかは不明である。

<sup>22</sup> 『国民読本参照国語科話方教材』の「教室内用語」については、村井(1991)の考察がある。

<sup>23</sup> 台湾総督府(1927)p.6に「本巻ノ使用八入学後第七週目ヨリ使用セシムルモノトシテ編纂セリ」と記されている。

(表5) 第一学年国語科時間配当表<sup>24</sup>

分科 学期	読み方			話し方			書方	計
	読本	課外 <sup>25</sup>	計	会話	談話	計		
一	15	-	15	-	117	117	-	132
二	87	-	87	30	57	87	18	192
三	51	-	51	16	33	49	20	120
計	153	-	153	46	207	253	38	444

## 4.2 各科について

### 談話

#### 第1学期 (資料1 参照)

- ・「範語教授」:「最も卑近な実際的な問ひ方をこれに依つて知らしめやう」<sup>26</sup>としたもの。
- ・「求知心」という児童の心理的側面を主体とする考え方に基づいて考案・配列<sup>27</sup>。

「吾々は先づ児童の立場に立つて教材を見なければならぬ。一学年の児童しかも入学当初の児童に何を授けたらよいものか、吾々は聴方第一を唱へた。しかしこれは決して聴かせるものゝみではないのである、聴かせる領分を広くしたいといふ意味であつた。であるから話させるというふ事はやはり行つていかなければならぬ。

<中略>

吾々は児童にきかせる(問はせる)事を真先にあげたのである。児童が物を知らんとする求知心のあらはれたとき、如何なる言葉を以つてそれを満足させるかといふ事を考へて見たのである。<中略>当校編纂の教授細目の巻頭に何をあげたか其は『コレ八何デス力。』であつた。これは求知心の第一のあらはれはこれであると思つたからである。これがスタートである。『母チヤンコレナー二。』を教室迄延長したのである。従つてこの問の形に重きを置くやうにしたのである。」

- ・「児童がやうやく問ひの形を習得してくれば教授は児童の問いに始つて教師の答へにをはる事になる」<sup>28</sup>と考へ、「問ひ方」を重視

#### 第2・3学期 (資料2 参照)

- ・「談話言語教授」:「読本」と関連づけ、「話サセル」ことに重きをおいている。
- ・掛図を教具として使用。その多くが国語読本の掛図。

「これは読み方に於いて学習したものを再び話し方として復習的に取り扱うという意

<sup>24</sup> 台北師範学校附属公学校研究部(1924)p.7。

<sup>25</sup> 「課外」とは国語読本以外の読み物教材である。台北師範学校附属公学校研究部(1924・1925)では、同校読み方研究部が編纂した教材を第二学年から課すこととしていた。

<sup>26</sup> 台北師範学校附属公学校話し方研究部編(1926)p.31。

<sup>27</sup> 同上 pp.26-28

<sup>28</sup> 台北師範学校附属公学校話し方研究部編(1926)p.32



味ではない。これは掛図による写生的発表」<sup>29</sup>を目的とした学習。

読本（資料1・2参照）

- ・国語読本巻一は、文字教授としては主として片仮名の教授。計75時間かけて学習し、第2学期半ば頃に終了。
- ・国語読本巻二は計78時間かけて学習し、第3学期末に終了。
- ・語の概念を確実に把握させるために、実物や掛図の使用を指示。
- ・教材の学習に入る前に、予備的取扱を指示しているものもある。（第3学期第5-6週「第19課 カアレン」参照）
- ・年中行事や気候風土に関する教材は、指導時期を実生活に対応させるよう指示。（第3学期第5週「第18課 オメデタウ」参照）
- ・3課～4課単位で1時間ずつ復習が配当されている。

会話（資料3参照）

- ・「談話」が「読本」と関連づけた学習内容となっているのに対し、「会話」においては「読本」との連絡はほとんど考慮されていない。
- ・学校生活場面だけでなく、遊びの場面や買い物場面など、児童の日常生活場面を広く捉えた教材構成になっている。
- ・ほとんどが児童同士の会話であるが、文体は敬体となっている。

第三期国語読本で常体の文が提出されるのは、巻五（第3学年用）から<sup>30</sup>。

教師と児童間の会話教材は1つのみ（第2学期第16週128回）。他に、買い物場面での店主と児童（第3学期第1週7回、第3週15回）、兄弟（第2学期第13週109回）、母親と子供（第3学期第7週36回）の会話教材がある。

- ・提出されている会話文は、勧誘表現「～マセウ」が最も多い。この他に、説明を求める／説明する、依頼、指示、申し出を表す表現が提示されている。

## 5. まとめ

- ・言語活動の本質の考察に基づいた「国語科」教育の体系化が目指されていた。
- ・話し方教育においては、「話す」という言語活動を構造化して捉えた教授法による授業が実践されていた。教材は、言語構造よりもむしろ児童の心理的側面を重視した教材編成となっていた。
- ・読み方教育に小学校の「国語科」教育の大きな影響が認められる（教科書・教授法）。しかしながら、第三期国語読本は、日本語を母語とせず、文化的背景も異なる台湾人児童にとっては負担が大きい内容の教材であったようであり、状況に応じて教材を具体化するための様々な教授上の配慮が認められる。

<sup>29</sup> 台北師範学校附属公学校研究部（1924）pp.1-2。

<sup>30</sup> 台湾総督府（1927）参照。

## 今後の課題

- ・小学校の「国語科」教育との共通点・相違点を整理し、公学校の「国語科」教育の特徴を浮き彫りにする。
- ・「国語科」教育が学習者に与えた影響を明らかにする。

言語生活、日本語観、アイデンティティー意識、習得した日本語の言語学的特徴

## 参考文献

- 黄振原(1993)「戦前台湾国語読本の語法的研究 『公学校用国語読本第一種』巻一を中心に」『学芸国語教育研究』11 東京学芸大学  
(1994)「戦前台湾公学校用国語(日本語)読本の研究」『アジア文化研究』創刊号 国際アジア文化学会
- 近藤純子(1988)「『構成式話し方教授法』について 台湾日本語教育史の一研究」『教育研究紀要』No.14 近畿大学教育研究所
- 周婉窈・許佩賢(2003)「台湾公学校與国民学校国語読本総解説 制度沿革、教科和教科書」吳文星他編著『日治時期台湾公学校與国民学校国語読本：解説・総目録・索引』南天書局
- 周婉窈(2003)「《公学校用国語読本》の内容分類紹介」吳文星他編著『日治時期台湾公学校與国民学校国語読本：解説・総目録・索引』南天書局
- 台北師範学校附属公学校研究部(1924)『話方読方公学校教授細目 第一二学年用』台湾子供世界社  
(1925)『話方読方公学校教授細目 第三四学年用』台湾子供世界社
- 台北師範学校附属公学校話し方研究部編(1926)『話し方教授に関する研究』台湾子供世界社
- 台北第一師範学校附属公学校研究部編(1930)『読方教育の研究』第一教育社
- 台湾教育会編(1939)『台湾教育沿革誌』(1995年発行復刻版、南天書店)
- 台湾総督府(1927)『公学校用国語読本第一種編纂趣意書』
- 村井万里子(1991)「明治期台湾における山口喜一郎の日本語教授実践の考察(1)」『北海道教育大学紀要(第1部C)』第42巻第1号

(付記)本研究は2005年度財団法人交流協会日台交流センター「日台研究支援事業」の成果の一部である。ここに記して感謝の意を表したい。